

方丈記 第十回

私は、父方の祖母の時代からある家を譲り受け、そこに住んで久しい。その後、その家とは縁が切れて、偲ぶ思い出などもたくさんあったけれども、その家にとどまることができなくなり、三十も過ぎてから、とうとう私自身の考えで、粗末な庵を結んで、そこに住むことになった。これは、もともと住んでいた家と比べれば、十分の一ほどの大きさでしかない。単に居住まうだけのことなので、それ以外の不必要なことのために大きな建屋をわざわざつくる必要もない。一応、敷地の周りには塀をつくったけれども、門を設ける余裕まではなかった。

ただ入り口の辺りに、牛車を入れる車宿を竹で組み立てて設けた。そんなありさまなので、雪が降ったり風が吹いたりするたびに、なんだか頼りない気がしないでもない。地所も、河原に近い所にあるので水難にあう恐れも多く、白波と呼ばれる盗賊に狙われる心配も大いにある。

なにもかも、どうにもならないことばかりの世の中で何とかかんとか生きてきて、心を悩ませるばかりでそれから三十余年も経ったが、その間、何かにつけて自分の思い通りにはならないことばかりで、どうやら私は、あまり運のいい方ではなのだなと思ひ知るに至った。

なにしろ、五十の春を迎えた時、家を出て出家することにしたが、もともと妻子がいるわけではなく、捨てられないような縁のある人などもない。禄がもらえる宮仕えでもないの、出家はしたものの、かといって何をすればいいかも分からず、ただ空しく、比叡山のふもとの大原山の雲を眺めて暮らすうちに、さらに五年の春秋が過ぎてしまった。

そうしていいよ、はかなくも消え行く露のような、六十にもなって、またまた、終の住み処をつくって、そこで暮らすことになった。これはいつてみれば、旅人にとっての一夜の宿のようなものであり、老いた蚕が、繭をつくったようなものだ。この家を、三十の時につくった家と比べると、その百分の一にもならないほどの小ささで、ようするに、歳を重ねるにしたがって、住み処はどんどん小さくなったという次第。その家がどんな家かといえば、広さはわずかに三メートル四方の方丈で、天井の高さは七尺（二、一メートル）にも満たない。